あなたのまちのコミュニティ活動情報誌

コミュニティしずおか

2018
150号
記念誌

地域再訪問記

コミュニティ静岡 地域訪問記

山村活性化を女性の手で
「くんま水車の里」グループ
（天竜市熊地区）

天竜市の中心から北へ車約三十分、桧林に囲まれた道を北遠振興センターの辻んの案内で、天竜市熊地区訪問した。

愛称くんま（熊）地区センターには、村おこしに奮闘する美しい三人のミセスが出えてくれた。昨年の六月に足した「くんま水車の里」ループ（会員三十一人、う男性は一人）の会長和子さん(44)と、太田(49)、大平展子さん(40)る。三人とも地域婦人Bで、この山村の活性女性で

左から 太田さん 金田さん 大平さん

「活性
りこの熊地区に人
くれるこ
を利用して

NPO法人夢未来くんま（浜松市天竜区）

150号を記念し、昭和63年1月5日発行第29号に掲載されたくんま水車の里へ再び訪問。村おこしを牽引された三人に再び出迎えていただきました。

「名もなきかあさん」たちが「先進事例」に！

浜松駅から車で1時間と少し走ったところにある浜松市天竜区熊地区。途中、スギヒノキに囲まれた山道を抜けて、ふわりと開いた街並みの先に道の駅「くんま水車の里」はある。

「くんま水車の里」を運営するNPO法人「夢未来くんま」は、昭和61年に始まった「熊地区活性化推進協議会」を前身として、平成12年にNPO法人化した団体で、運営する食事処や加工所産品で得た収益を、配食サービスやサロン開催によって地域に還元している。こういった仕組は最近こそ多くなってきているが、それを平成12年から始めている「くんま夢未来」は、先進事例として全国的に名が知られている。

昭和63年1月のコミュニティ静岡に、「くんまの女性たち」という記事で掲載された3人の「かあさん」たち、金田さん、太田さん、大平さん。天竜の「名もなきかあさん」たちが始めた活動は、どんな風に「先進事例」となったのか。

Topics トピックス

地域再訪問記…… P1
NPO法人夢未来くんま（浜松市天竜区）
クローズアップ …… P6
NPO法人磐田鮫島方式震災水対策センター（磐田市）
地域再訪問記パート2…… P7
清水町長沢区コミュニティ推進委員会（清水町）

コミック
のりづき・りえ

活動の始まりと続けられた秘訣

この事業が始まったきっかけは、昭和60年に開催された「明日の熊を語る会」での金田さんの発言。金田さんは、「熊には味噌や蕎麦やしいたけなどの美味しいものがたくさんあるから、宿場街だった時のような拠点をつくって、それを発信したい」と夢を語ったのだという。

その発言をきっかけとして、女性たちを中心として活動が始まり、財産区からの出資や行政の支援も受けながら味噌や蕎麦の加工所や食事処などが作られ、平成７年、「くんま水車の里」は、県内で2番目の道の駅に登録された。

和やかな空気をまとっている金田さん。金田さんはずっと道の駅の「駅長」として関わり、先日「定年」を迎えたが、「名誉駅長」として今も店頭に立っている。「当時は、『失敗したらここに住めなくなるね』と言いながら必死でやっていました」と笑顔で話してくれた。

「素人の主婦が蕎麦を出すなんて始めたから、『こんなもの食えるか』とどんぶりをひっくり返されたこともありますよ」と話すのは「かあさんの店」の店長を務めた太田さん。太田さんは、今は第一線を退いているが、活動を始めた時、夫からの「お前たちならできる」という言葉や、家族の支えで、辛い時も乗り切ることができたのだという。

「ここまで来るとは思っていませんでした。言いだしっぺのメンバーに、婦人会や農業婦人部などの地域活動をしていた人が多く、何かを決定するのにみんなでとことん話し合っていたのが活動の底力になっていたと思います」と冷静な分析をするのは、NPO法人の副理事長を務める大平さん。

かあさんたちが視察に来た人からよく聞いたのは、「女性同士の活動は継続がなかなか難しい」という言葉だそう。

「私たちは、競い合うのではなく、お互いを認め合うようにやってきました。メンバーにはかならず得意なことがあり、これなら○○さん、あれなら○○さん、という風に決まっていました。『私の一点』を大切にして、マイペースでやってきたのが良かったと思います」。

仕組の基礎は、「コミュニティ活動」

平成27年、道の駅は20周年を迎えた。今では若い人も多く入ってきて、後継者も育っている。後継者が入ってくる秘訣は、「自分たちが楽しくやること」。自分たちが楽しくやっていると、周りの人もだんだん参加するようになるのだという。

今後の活動の展開について伺うと、「10年後にも住み続けられるためには、今からの仕組づくりが大切」ときっぱり話した大平さん。事業を広げることより充実させることに重きを置いているとのことであった。

かあさんたちに共通していたのは、「くんまをなんとかしたい」という想い。「先進事例」となる仕組みの素晴らしさは、「名もなきかあさん」たちの「人」と、地元への強い想い、そして「互いに認め合い、楽しく活動する」というコミュニティ活動の原点が基礎となっていたのである。

「くんま水車の里」で食べた蕎麦はあたたかく、「かあさん」たちの愛のこもったやさしい味であった。

◇名誉駅長・NPO法人副理事長：金田三和子
（問合せ・053-929-0636）

レポート：石川晴子　編集委員

平成元年水車小屋前でのソバ打ち姿

現在の水車小屋、
後ろは平成13年にできた物産館

得た収益で開催される
サロン活動

150号記念対談 ～前編～

コミ推協誕生から今日まで、携われてきたお二人に「コミュニティ静岡」を振り返っていただきました。

推進専門委員：角替弘志 氏　漫画家：法月理栄 氏
聞き手：コミ推協

コ：コミ推協が生まれたのは昭和54年8月29日。その翌年の9月15日にコミュニティ静岡が発行されました。第1号発行当時を振り返ってみていかがでしょうか。

角：時代背景的に言うと高度成長期に農村から都市へ人が移動し、農村のコミュニティが衰退、都市には団地がどんどん作られたが人の繋がりが極めて薄く、「人と人とのふれあいやつながりを改めて作り直されなければいけない」という動きの中で、防災や環境問題などいろんなことが絡んでいった急激な社会構造の変化がありました。

　そんな中、昭和49年の七夕豪雨、昭和51年の東海大地震説発表などもあり、そういった事柄がコミ推協誕生の一つの背景だったと思います。

法：父がコミ推協の推進専門委員をしていた縁で始まり、お話があった時は、ストーリー漫画を書いていましたね。だから4コマと1コマっていうのは苦手で…。第1号も防災頭巾の代わりに仮面ライダーのヘルメットをかぶっていますが、すごく頭をひねったんだと思います（笑）自分としてはなるべく社会の様子を反映させたいと思っていたんだなと思うんですけど。

　昭和55年だから30歳ですね。子供が2歳で、横でギャーギャーしているのを寝かしつけてから書いていた環境でした。

　四コマ漫画の主人公、コミさんが動き出すまではキャラクターが乗らなくて苦労しました。登場人物もだんだん増えていて途中からは町内会長が出たり、一人暮らしのおばあちゃんが出たり、だから締め切りがくるごとに、また新しく自分で登場人物を考えたりして…。自分の中で見えてこなかったですね。今見るとちょっと恥ずかしいですね。いかにも苦労したんだなと思います。

角：今、お話があった防災ファッションというのは、先ほど言った時代背景的にヒントにあったと思います。同じく1号の四コマ漫画の中に、公民館の書道教室がありますでしょ。公民館学習というのがこの時期非常に盛んだったんですね。公民館っていうのはいわゆるコミュニティ活動の一つの中心ですからそこに皆が集まっていたんですね。

コ：1号から「コミさん」が出てきますが、どうやって生まれたのでしょうか？

法：五十嵐さん(当時事務局員)と一緒に考えたと思います。「コミュニティだからコミさんでどうでしょう」とご相談したかと…。まさかこんなに続くとは思ってもいませんでした(笑)

角：僕も150号になったとびっくりしました。
スタートの頃は、コミュニティなんて難しい言葉を使わなくたっていいじゃないという声も結構あったんですね。コミュニティの情報誌ができて皆の手元に届くようになったことで、コミュニティっていう言葉の定着に大変大きな力を持ったんじゃないかなと思いますよ。

　第1号の表紙に「今響くコミュニティづくりの槌音」とありますでしょ。いわゆる町内会というのはどちらかというと行政の役割的な感じが強調されていたんだけれども、高度成長期後は、ふれあいのある社会を作ろうと変わってきました。地域の人たちが一緒になって活動をしていく上では「こういうものが必要ですよ。コミュニティは大事なものですよ」とその事を皆さんに理解してもらうそういう意味での第1号発行はとても大事だし大変だったと思いますね。

　時代の変化を感じるのは、活字がだんだん大きくなっていること。横書きになって、カラーになっていく。新聞の文字もだんだん大きくなっているんですけど、そういう意味では読者の対象も高齢化してしてるのかなーなんて(笑)

次号へ続く

昭和55年9月15日発行第1号

まちからむらから

静岡市　子どもたちの未来の為に・・今できる事とは♥

オレンジサポーターズ～
籠上中学区を守る会～

改修した井宮北小学校の投てき板

▼オレンジサポーターズとは、籠上学区（籠上中、井宮小、井宮北小）3校のPTA現役、OBと地域の有志の方との協働団体。様々な行事の中で現役PTAでは手が届かない部分のサポートをメインに活動している。

　大きな活動の1つに、老朽化した井宮北小竜太板（投てき板）の改修を行った。PTAや地域の方々に木材やペンキなどの資材提供を頂き、子どもたち、保護者、先生方、地域の方と多くの人が携わって、板の張替えと壁画の描き直しを行い、素晴らしいものが出来上がった。

▼静岡市型小中一貫校の整備が、4年後には具体的に始まる。現段階から3校のPTAが連携を図ることで、子どもたちに他校の生徒との交流機会を持つことで、スムーズな学年移行のお手伝いができるようにしたい。

▼子ども会が終わり地域とは縁遠くなる働き世代が、子どもたちや現PTAを応援しようという熱い思いで立ち上がり、楽しい波動が伝わってくる団体である。

◇代表：望月靖人さん（問合せ・090-5116-5714）

【情報提供・工藤真理子】

吉田町　地域の大人とレッツクッキング！

片岡きらめき塾

補助してもらいながらチョコレートを刻む

▼吉田町片岡会館で、和食を作って味わい、一緒に調理しながら地域の大人と交流しようと、小学3年生以上を対象にした料理教室が開催された。子どもを育むことを主に活動する「片岡きらめき塾」が行っている活動である。

　今回、バレンタインも近かったことからチョコ菓子作りを加え、募集したところ女の子を中心に18人が参加した。

▼献立は、ミルク豚汁・ミルクポテトサラダ・ちくわの卵とじの3品。会からは7人がスタッフとして参加し、1班に2人のスタッフがつき包丁の持ち方指導から調理が始まった。調理の最中には、スタッフと子どもが雑談する姿が見られ和やかな雰囲気となった。

▼昨年度「子どもたちと一緒に料理をしてみようか」と始まったクッキング。子どもでも無理なく作れる献立を考えることは大変だが、和食の良さを伝え交流を図るために今後も続けていく。

◇代表：近藤順次さん

【情報提供・吉永優子】

菊川市　ちゃっきり母ちゃん、ダンベル効果

ダンベルの会

明るく元気に慰問活動

▼平成20年、健康づくり講座に参加した菊川市牧之原地区に住む60代～80代の茶農家14人のお母さんたちが、「ダンベル体操」をきっかけに地域を盛り上げている。

　当初は、毎週日曜日の夜に1キロのダンベルで、榑林みつ子先生の指導のもと、音楽に合わせて楽しく体操していたが、それだけでは物足りなくなり、牧之原納涼大会や地区のフェスタ、敬老会などで手作りの衣装で「七福神」になりきり「福」を撒くようになった。七福神でのデイサービスへの慰問は、グループにとっても元気をもらい笑顔になる学びの活動となっている。

　また、平成24年からは、麹を作って、塩麹や甘酒のレシピ付でフェスタで販売したところ大好評を得ている。

▼ダンベルの会が発足したことで、健康づくりはもちろん農繁期の忙しい中でもお互いに声を掛け合い優しさのキャッチボールができている。ダンベルをきっかけに地域に飛び出した楽しい団体である。

◇代表：木野澄枝さん（問合せ・事務局0548-27-2838）

【情報提供・渡邊政幸】

掛川市　大人も子どもも一緒にぺったんぺったん

蘭ヶ谷ふれあいいきいきサロン

大人を手本にお餅つき

▼平成25年に発足した蘭ヶ谷ふれあいいきいきサロンは「高齢者の引きこもりを防ぎ、元気に過ごしてもらう！」「老いも若きも交流しよう」と年10回のサロン活動をしている。
▼中でも、29年度で5年目となる年末の餅つき大会には、100戸数の小さな地区ながら50人余りが公民館に集まった。餅つきで使用する杵や臼は、毎年区民から借りており区民の協力に大変感謝している。大きな臼と並んで子ども用の臼がセットされると子どもたちが大人を手本に代わる代わる餅をつく。途中から地区に住むインドネシア出身の方とその友人たちも加わって初めての餅つき体験。日本文化の体験は、帰国前の良い思い出になったようだ。区民にとっても国際交流ができ良い思い出となった。
▼サロン活動では、足腰の弱い方の参加を増やすことや塾や部活に忙しい子どもとどう交流するのか課題もあるが、これからも世代を越えたコミュニティづくりに役立てようと世話人一同がんばっていきたい。

◇代表：山内朋司さん（問合せ・080-6945-1748）　【情報提供・柴田清一】

湖西市　地域を活性化させる「親水公園まつり」

湖西フロンティア倶楽部

5月3日に開催する新緑まぶしい「春の親水公園まつり」

▼湖西市内の清流、今川の上流部にある「おちばの里親水公園」で年3回開催される「親水公園まつり」は、豊かな自然を多くの市民の方に楽しんでもらおうと、湖西市内の市民団体や地元自治会が協力しあい、自分たちの資金だけで、手作りの祭りを企画開催している。その中心となって活躍しているのが、湖西フロンティア倶楽部です。
▼スタッフや来園者のニーズに合わせた独自のイベントは、5月は、大空を泳ぐ100匹の鯉のぼりを見ながら自然に親しみ、11月は、湖西連峰の紅葉を楽しむとともに大知波峠廃寺跡から景色を楽しむ。2月は、梅園の花を楽しみながら春間近の自然に親しむをコンセプトに開催。豊かな自然が訪れた方々の心身をリフレッシュすること間違いなし！
▼5月3日に開催する祭りは、今年で第11回目となる。継続の秘訣は、「無理をしない」「自分たちも楽しむ」「持ち味を活かす」という倶楽部のモットーにありそうだ。

◇代表：飯田康仁さん（問合せ・事務局　090-1291-3210（鈴木））
【情報提供・石田智子】

地域活動情報

詳細はホームページでご覧になれます（URL　http://www.sizcom.jp ）

No.	市　町	活　動　名	主　催　者	趣旨・目的	月　　日
1	小山町	簡単な体操で心も身体もリフレッシュ！	フラワーガールズ	生活習慣病・ロコモ予防・けがの予防に努めたい。	月　2回
2	島田市	地元食材で「こころと体にやさしさを」創造して元気になろう	brisa flor（ブリッサフロール）	若者たちが地元の食材で、地域活性に立ち上がりました。	月　1回 第2日曜日
3	川根本町	川根の自然と人々はいつでも皆さんを歓迎します	一般社団法人エコティかわね	川根本町の自然資源を生かした地域観光業を推進し、地域の活性化を目指しています。	通年開催
4	牧之原市	そばうち道場（明るく元気な萩間）	萩間絆づくり実行委員そば打ち班	耕作放棄地をなんとかしたい、地元の若者がここに残りたいと思う魅力ある地域づくりを目指します。	平成30年1月23日（火）
5	御前崎市	元気全開、80歳を支えます！	支え合い　ほろがや	外出の機会が少ない高齢者の方を対象にした教室。だれもが気軽に参加できるように送迎活動しています。	月　1回 第2火曜日
6	浜松市	田んぼオーナー制度	特定非営利活動法人ひずるしい鎮玉	少子化にともない増えてきた遊休農地の減少と都市部からの交流人口の増加による地域の活性化を目指します。	年　4回 5/26　7/7　10/6　11/3

クローズアップ

創意工夫や新しい手法を活かしている
団体を紹介します。

勢いよく出る水
ここまで8分

取材時の
実演の様子、
消防ホースを
吸管につなぐ

蛇口を付けて
活用もできる

身近にあるもので出来る事を考えた

消防ポンプで地下水を汲み上げる

NPO法人　磐田鮫島方式震災水対策センター

磐田市長野地区鮫島は遠州灘が広がる磐田市南部の地域。この地で「消防ポンプで地下水を汲み上げる」取り組みをされている三浦さん、柴田さん、広瀬さん、石川さんにお話を伺った。

あの3・11がきっかけに…

2011年3月の東日本大震災では人間にとって何よりも必要なのは「水」であるにもかかわらず、水道の復旧は一番最後となった。備蓄のペットボトルはその場しのぎ、自衛隊の給水車も近くに来るとは限らない。ならば「避難所が水源になればいい」と思いついた。

三浦さんと柴田さんは、元浜松市下水道部職員であり、共に水にかかわる基礎知識は持ち合わせている。地下10mに、小口径塩ビ管を打込み可搬式消防ポンプ（自治会にある一般的な消防ポンプ）と繋げ地下水を汲み上げる方法を試してみた。平成23年度の鮫島自治会役員をはじめ、現職の現場監督の力をかりて、手弁当で震災から半年後の10月に地区内の神社境内で原理作動実験を実施、翌年3月には土木工事のエキスパートの広瀬さんも加わり実証実験（給水施設の蛇口から給水）の大成功を収めた。

「磐田鮫島方式」という名前は、鮫島自治会役員が中心となり作り上げ、磐田市から広げたいという気持ちからだそうだ。当時の鮫島自治会長だった石川さんは、その後長野地区長として「皆の為になることなら是非やろうではないか」と長野地区の各自治会長にアピールをした。

多くの人に知ってもらいたい

訪問の際、早々に長野交流センターのグランドに直行し「鮫島方式」の実演をしていただいた。センターには塩ビ管が常設してあるので、可搬式消防ポンプを運ぶ→ポンプ設置→ホースから水がでるまで約8分だった。蛇口付のパイプを設置しても30分あれば完了とのことだ。

年間4～5回の会合兼点検を行っているが、防災訓練などは従来の訓練優先で「磐田鮫島方式」の啓発はできないでいる。また、「良い仕組み」だと認識してもらっているが、費用や自治会役員の任期が壁となり、その先に話が進まない現状でもある。他地域での導入を図るためには、国・県・市も一体となって普及啓発に取り組むことが今後の課題のようだ。

いつ来るかわからない東南海トラフ大地震。被災者は東日本大震災の比ではない。多くの人にこの「磐田鮫島方式」を知ってもらい、災害当事者になるであろうという意識を持ってもらい、防災備蓄品の一つとして「磐田鮫島方式」を行政も取り上げ、一人でも多くの人命を助けてもらいたい。

◇代表：三浦晴男さん（問合せ・0538-32-9417）

レポート：中村弘美　編集委員

今も「旬」、積極コミュニティ～34年目もいきいきと～

清水町長沢区コミュニティ推進委員会（清水町）

34年の時空をこえて

地域訪問記
義務から積極コミュニティ
●国の指定に張り切る
清水町長沢区
コミュニティ推進委員会
市町村だより
まちづくり講座と
コミュニティ読本
●浜松市●
中田俊子

昭和60年
9月30日発行第20号

清水町の役場から西へ行くと、程なく狩野川を渡る橋が見えてくる。昭和60年の取材時にはなかったこの橋の手前が150号記念の再訪問地、清水町長沢区（現約1,100戸）。当時の長沢区は、既存の自治会運営に役員以外の多くの人が参加して義務的から能動的な組織に変えていこうと組織の中に専門部を設け、県や国の指定をステップにコミュニティ活動成長期にあった。今回、34年ぶりに現在の活動状況を伺いに訪れると、会長の岩崎さん、委員長の前田さん、各専門部長の山田さん、工藤さん、春田さんが公民館で迎えてくれた。訪問日は、年度最後の行事である河川敷の草刈りがあり、その後の慰労会が終わった後で皆さんの表情には活動をやり遂げた充実感が感じられた。

最初に午前中の作業写真を見せていただく。きれいになった河川敷にテーブルとイスが並び、談笑しながら食事をする老若男女。和やかな一時がよみがえってくるようだ。

河川敷の草刈り後はお楽しみの慰労会

地域デビューの仕掛けは子ども会

組織を紹介すると、企画部、文化部、資源部、河川敷利用推進部、広報部の五つの専門部があり、発足当時と変わらず毎月18日の定例会での話し合いを元に、総勢62人の委員でコミュニティ活動を進めている。

話をうかがって一番印象に残ったことは、他団体への応援を継続していること。特に子ども会とは廃品回収やどんど焼き等の応援をしながら、子ども会と顔の見える関係をつなげている。取材に応じてくださった方たちもコミュニティ活動のきっかけは、子ども会の役員をした30代からのつながりとのこと。

活動が終わった後は、慰労会が定番。若い世代の話を聞き、何をやりたいか夢を語ってもらう本音トークの場になっているという。（・・・なるほど。これが30年以上継続している秘訣なのでは！？）

また、全戸配布している広報は、年6回発行しており、昨年100号を達成した。岩崎さんを中心とし、地域の歴史やいわれなども盛り込んでいる。

年3回の廃品回収、貴重な活動資金になる

顔の見える交流を通じて、これからも

最後に、これからの抱負・夢を聞いた。山田さんは「4つの区でできている小学校区で一つの活動をして、防災を」、工藤さんは「区内の外国人居住者とのかかわりを」、春田さんは「区の方々のお手伝い、バックアップを」、岩崎さん、前田さんは共に「若い人たちが一緒に動ける環境づくりを」と熱く語っていただいた。次の世代へとバトンが渡され、さらに発展していく清水町長沢区コミュニティをまたいつか紹介できることを期待したい。

◇委員長：前田雄三さん（問合せ・055-971-5274）

レポート：髙村　光　編集委員

地域活動に関心のある方へ！

お知らせします

※お問い合わせ、お申し込みは当協議会へ

★コミュニティカレッジ 地域づくりについての知識や手法を学ぶ

コミュニティづくりの大切さ、地域での話し合いの進め方などコミュニティ活動を進める上で必要なスキルや知識を学ぶ講座です。座学だけではなく、先進的な活動団体への訪問研修も行います。

地域で活動されている方や地域活動に関心のある方はぜひ御参加ください。

なお、申込受付等の詳細につきましては、関係機関等を通じて別途改めてご案内します。

※内容については、後日確定します。

回数	予定日	10:00～12:00	13:00～15:00	会　場
1	7月21日（土）	・開講式 ・自己紹介／アイスブレイク	講義「コミュニティづくり」	県総合社会福祉会館（静岡市葵区）
2	8月4日（土）	講義「コミュニティリーダー」	講義「話し合いの進め方」	
3	8月～9月	活動集団現地訪問（県内3カ所選定）		1カ所に参加
4	9月8日（土）	ワークショップ「コミュニティ実施計画づくり」		県総合社会福祉会館（静岡市葵区）
5	9月15日（土）	10:00～11:30	11：30～12：00	
		記念講演「未定」	閉講式	

★コミュニティ活動集団育成事業

この事業は、人々が協力し合って住みよい地域をつくるために活動する集団を「コミュニティ活動集団」として指定し、活動に必要な経費の一部を助成することによって、地域の先導的役割を担う活動集団の育成支援を行うものです。

指 定 の 期 間：毎年度４月から翌年度３月までの２年間とします。
活動経費の助成：募集集団数 15 集団。活動経費として１集団当り、初年度７万円、翌年度３万円を助成します。
活動集団の指定：申込みに対してその内容を審査・選考の上、指定します。
募　集　開　始：４月中旬

編集・発行
地域情報をお寄せ下さい!

静岡県
コミュニティづくり推進協議会
〒420-0856 静岡市葵区駿府町1−70
総合社会福祉会館3階
【TEL】054-251-3585
【FAX】054-250-8681
【URL】http://www.sizcom.jp
【E-mail】sizucom0829@po.across.or.jp

スポーツ安全保険®
対象となる事故　団体活動中の事故／往復中の事故
保　険　期　間　平成30年4月1日の午前0時から平成31年3月31日午後12時まで
4名以上の団体・グループでご加入ください。
公益財団法人 スポーツ安全協会 静岡県支部　〒422-8004 静岡市駿河区国吉田5-1-1
TEL 054-262-3039　電話受付時間　午前9時～午後5時（土、日、祝日を除く。）
スポーツ安全保険　検索
インターネットからも加入受付を行っております。詳しくは、ホームページをご覧ください。
保険の詳しい内容、資料の請求は、ホームページをご覧ください。
http://www.sportsanzen.org
●資料請求は、インターネットより受付けております。
携帯電話から資料請求ができます。